

<研究報告>

地域における終末期

——「ひかり」と「ひとり」——

End of life in the rural area:
Being alone as you are

藤戸 善伸 (札幌医科大学)
Yoshinobu FUJITO (Sapporo Medical University)

要旨

地域での死は、都市部と比較し、より平穏かもしれない。日本人は、自分の価値を判断する際に、他人に何ができるかを重視する傾向がある。そのため、何もできなくなる終末期には、自己の無価値感が強まる。対照的に特に都市部に順応できなかった住民は、その地域以外の選択肢がなく、他人もその存在を受け入れざるを得ない。そのため日常的に、ひとり、自分のあるがままでいることになっており、死を目前にしても平穏である可能性がある。この「ひとり、あるがままでいる」感覚は、現代のスピリチュアルペインへの重要なヒントである。この報告では、地域での臨床経験と、2つの著述に於ける「光」の記述をとおして、終末期の「ひとり、あるがままでいる」ことについて考察をおこなった。

Abstract

In this report, through the clinical experience in the rural area and through the analysis of expression “light” in two writings, pain and blessings of “being alone as you are” in the terminal life are discussed. Death in the rural area is somewhat different form that in the urban area. People facing death seem feel more secure or dignified in the rural area. In Japan one tends to confirm one’s value through how one can influence and help others. End-stage condition often robs people of the ability to do something to others, which means, ends up depriving them of their dignity. In contrast, rural residents, especially those who do not have the ability to catch up with urban life, cannot help living “there”, and other residents cannot help accepting them as they are. They are already “alone as they are” long before they approach ends of their lives. This is one of the reasons why they do not get disturbed and remain dignified. This feeling of being alone, allowed to be oneself may be the key to spiritual pain in the modern era.

Keywords : thanatology (死生学) rural area (地域) urban Area (都市部)
light (光) solitude (孤独)

1. はじめに

過疎地域と都市部で死の意味は異なるのだろうか。地域における終末期医療、という論題を頂いた私は考え込んでしまった。私はいわゆる「僻地」で地域医療に従事していた経験がある。そこはひどく天候が悪化すると、今でも陸の孤島になる。

その地で、私の印象に残った終末期の患者さんがいた。Aさんとしておこう。Aさんは以前から肺癌の診断を受けており、なんの治療をすることもなく町営住宅で独居していた。近所の人に勧められてAさんが診療所を受診したときには、衰弱して痩せ細り、検査では末期の状態が示唆された。Aさんはほとんど語らず、ただ入院だけは断固拒否した。診療所が往診に入ることになったが、医療資源も福祉資源も乏しい地域では、配食サービスや、訪問看護サービスなどは提供できなかった。食事をとることもままならないのでは、と私はじめ、スタッフは心配した。しかし、Aさんはそれから半年以上近所の人々の援助をえて、最小限の食事を取り、寝たきりの生活を続けた。最後は誰に看取られることもなく、ある朝近所の人々が亡くなっている状態で発見した。私は少しの薬を処方し、往診を続けただけだった。

ここまで何もしなかったことと、しかし本人の望みは満たされていて、穏やかな死の迎え方であったことに、私は気が抜けるような感覚とともに、驚きを感じた。

この体験を新たな視点から見直すため、いくつかの私的な体験をたどりながら、思索をすすめてみたい。

2. 光の体験・光の描写

私が終末期に関していくらかでも考えはじめたのは、小学校高学年のときに出会った、『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』という本を読んでからである。まだ、ぞくぞくする死への恐怖感しか持っていなかった私は、家にあったその本を読み、30歳の若さで死に向き合い、言語化する人間がいるということに衝撃を受けた。骨肉腫で下肢切断をした医師が、数年後に再発を知る。再発を知った著者は、病院から外に出たときに不思議な光景に出会う。

その夕刻。自分のアパートの駐車場に車をとめながら、私は不思議な光景を見ていました。世の中が輝いて見えるのです。スーパーに来る買い物客が輝いている。走りまわる子供たちが輝いている。犬が、垂れはじめた稲穂が雑草が、電柱が、小石まで美しく輝いてみえるのです。アパートへ戻って見た妻もまた、手を合わせたいほど尊くみえたのでした。(井村和清 [2005:105])

この場面の意味を理解することはできなかったが、なぜか強い印象を与え、私の記憶に強く残っている。

その後上述の地で医療に従事していた私は、診療所のすぐ裏にある日蓮宗の寺で行われた慰霊祭に参加した。診療所でなくなった方の慰霊である。銅鑼が鳴り、読経の合間に亡くなった方の名前が次々と続く。私は亡くなった方々の顔を思い出していた。未熟な私の外来に、けんかをしながらも、こりもせず通ってくれた方、彼女は車にひかれてなくなった。都市部の病院から引き継いで一ヶ月もせずに誤嚥でなくなった方…そのとき目を閉じていた私は、暖かい光の中に吸い込まれる体験をした。人が死ぬとはこういうことなのかもしれないと思った。その時直感的に感じたことは、この光は、亡くなった方の温かさや受容であって、その光としてのほたけは確かに死後も残っているということである。一方で私が光に吸い込まれ、一体化するということは、いずれ名前のついた自分というものはなくなるということ。名前がなくなり、個としての自分はなくなるが、

光としてのほたらきが残る。そういうことを感じた。

このようなことを思い出しながら地域での終末期について考えていたときに、ヒントになる書籍に出会った。スピリチュアルな記述が多い『「私」という夢から覚めて、私を生きる』という書籍である。この中で大学生であった著者・中野真作は、（私が医学的見地から見ると）うつと思われる状態におちいるが、ある日大きな転機を迎える。毎日体を引きずるように生活し、外出もままならなかったある日、

ふと気がつくと、不思議なことが起こっていた。

「僕」の身体の表面がキラキラ輝いている。（中野真作 [2016：33]）

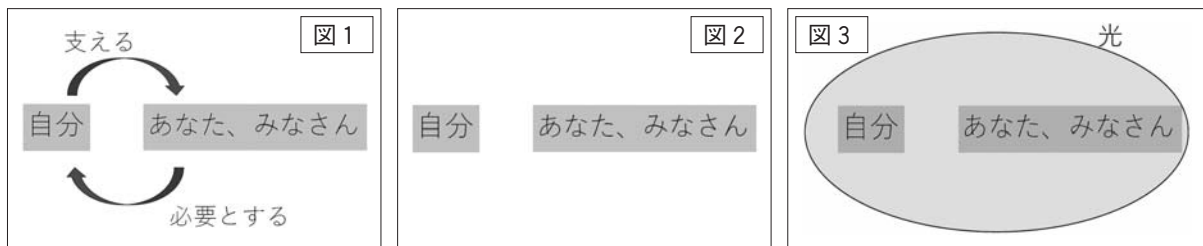
そしてその翌朝の出来事を、「光の中へ」という表題で次のように記している。

世界がこのように「在る」！

花が咲いている。太陽が輝いている。風が吹いている。人が歩いている。車が走っている。

音が聞こえる。香りがある。色がある。（中野真作 [2016：35]）

前述した医師が見た風景と酷似していないだろうか。私が体験した光を含めて、同一視して良いかどうかははっきりしないが、光が人間やもの由来ではなく、一人称、二人称、三人称をはみ出していること、そして光が、受容、おそらくは無条件の受容を意味することは認めてよいと思われる。



3. 孤独とひとり

日本人の終末期において望まれる死のかたち、good deathの研究をみると、人間関係に関することが上位を占め、宗教的な内容があまり含まれないことが欧米との差である（4，5，6）。日本における、他者との関係性を重視する傾向が、このような研究にも現れている。他者との関係性が重視され、超越的な存在を意識しないことは、自分の評価も他者との関係性に依存することを意味する。他に判断の基準がないからである。図1にあるように、人は相手に、もしくは社会に対して為したことに対応して自分が受容されていると感じる。死へ向かうということは、相手、社会にたいして何もできなくなることであるということであり、同時に自分の評価の源泉も失うということである。その時人は断絶を感じる（図2）。現代の日本人は自分が相手に何かをできなくなった時点で、隠居、引退を考える。人生引き際が肝心、という言葉までである。最近はやりの「終活」も、周りの人に迷惑をかけないという、引退の構図が透けて見える。図2と同じ構図である。その結果は孤独である。

再発を知り、自分の余命が短いことを知った医師、おそらくはうつ状態の極致で何もできない状態にいた大学生、二人とも同じく周囲との断絶を感じたはずである。そののちに光の体験をする。光の中には自分だけではなく、相手、もの、すべてが取り込まれている。person-personから

person – non-person/non-person – non-person の関係になる。非・人称の間関係であり、この意味で無・人称の関係とまでいってもよいのかもしれない。ただし、無人称の関係に向かう過程では、person – person という横の関係はなくなる。私は、「ひとり」、ということになる。

確かに、『「私」という夢から覚めて、わたしを生きる』で中野は前述の体験に引き続き、このように述べる。

もっとも「僕」が見たのは、「光」ばかりではない。

それはとほうもない恐怖だった。

「僕」はこの世界の中にたった一人で存在していたのだ。(中野真作 [2016: 37])

しかし図 2 と図 3 の構造は似ているようでいて根本的に異なる。

もう一つ例をあげたい。山折哲雄は、『「ひとり」の哲学』で、親鸞の「ひとり」として

「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」

(山折哲雄 [2016: 14])

を取り上げている。山折は、

そのひとは万人のなかにまぎれこんでいる。しかし、そのひとりの自分が、ふと絶対の救済仏にむきあったとき、阿弥陀如来のまなざしが自分ひとりだけに向けられていることに気づく。気づいて戦慄する。(山折哲雄 [2016: 15])

と解釈している。しかし一般的に阿弥陀の願は衆生に向けられたものである。それが「親鸞一人がため」とはどういうことか。

再度中野真作の体験にもどる。光を感じたあとに、中野は奇妙な感覚におそわれる。

それまで「僕」の外側に見えていた世界は実は「僕」の内側にあり、「僕」の内側の世界だと思っていたものが全部外側にあった。口から手をつっこまれて、身体を全部裏返しにされたような奇妙な感覚。(中野真作 [2016: 39])

内側と外側が裏返しになるとは、構造的な逆転である。私たちはしばしば、光を仰ぐ、と言う。この場合、光は私たちの外にある。一方、前述した慰霊祭で、私は個を脱ぎ捨てて、光と一体になる体験をした。ということは、個は、光すなわち非・人称の外側、言い換えると、光は個の内にある。より正確に言えば、個があつて光があるのではなく、光が先にあつて個がある。光が先にあり、内にある。この視点で考えてみる。

中野が体験したことは物理的な内外の問題と言うよりは、因果的な先後の問題と考えた方がよいのかもしれない。個があつて、その外側に探すべきと思っていたものを、個の内にすでに存在していたことを発見した、ということ表現している。

親鸞の言葉をふりかえるなら、阿弥陀仏が衆生にあわれみを分け与えるのではない、自分の内にすでに阿弥陀仏そのものが存在している、ということ述べたのではないか。衆生があり阿弥陀仏があるという俯瞰された全体像ではなく、親鸞は、自分の内でのみ知ることができ、そしてそこで完結している阿弥陀仏、という意味で、ひとり、という言葉をつかったのではないか。

図 2 と図 3 では、たしかに一人称と二人称、三人称との関係性はいずれも断絶している。しか

し、図3ではあらたに非・人称との関係が生じており、最終的には、無・人称の関係性ともいえる、より根本的な関係性の変化を意味している。

4. 地域における終末期

少ない体験と記述からではあるが、光／無・人称の関係性は、少なくとも日本における生きることのあり方に関する気づきの一類型、スピリチュアリティの一つの形と考えられそうである。

ここで地域に視点を戻してみる。冒頭に述べたAさんの死の迎え方は、孤独、断絶をあまり感じさせない。それはなぜだろうか。実は彼は最初からある意味で断絶していたのかもしれない。

地域ではそこで生まれたということだけで、そこで生きていく。なにか能力があるからではない、人の役に立てるからではない。すでに地域では受け入れられているのである。しかし、それは快適な受け入れではない。ちやほやされたり、尊敬されたりするわけではない。そこにあってよい、それだけのことである。

東京のような都市部に住んでいる人間は、よほどのことがない限り、そういった体験をしない。都市部では何かできるから、そこにいて良いのである。都市部では他人に何もできなくなることを見越して、隠居、引退を考える。前述のように、「終活」も同じ文脈である。

一方地域では、少なくとも冒頭のAさんが住んでいた地域では、彼は受け入れられている。それはただそこにあっていいという受容だから、前項でいう、ひとり、なのである。しかしAさんはそれに不満を抱かない、焦らない。おそらくそれは、以前から、おそらくは生まれたときからそのように受け入れられていたからではないだろうか。私が気の抜けたような感覚をもったのも、おそらくはAさんに焦燥感、不安感をほとんど感じなかったからである。

地域では図3の構造がもともとあるのではないだろうか。というよりは、日本の社会構造の変化が図1や図2の構造を生んでしまったのかもしれない、僻地では以前の構造が遺残しているにすぎないのかもしれない。

もちろん、「ひとり」を地域全体に一般化することはあきらかに誤りである。地域にも都市部と同様の関係性で存在している人が多くいる。だが、地域には、その多様性の中に、死に対する生のあり方のヒントを求めることができそうである。

本報告は、北海道生命倫理研究会第10回セミナー 2017年7月21日（金）札幌医科大学における発表に加筆修正したものである。

文献

1. 井村和清, 2005:『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』, 祥伝社
2. 中野真作, 2016:『「私」という夢から覚めて、私を生きる』, 青山ライフ出版
3. 山折哲雄, 2016:『「ひとり」の哲学』, 新潮選書
4. Hirai K, Miyashita M, Morita T, et al. Good death in Japanese cancer care: a qualitative study. J pain Symptom Manage 2006; 31(2): 140-7.
5. Steinhauser KE, Clipp EC, McNeilly M, Christakis NA, McIntyre LM, Tulsky JA. In search of a good death: observation of patients, families, and providers. Ann Intern Med. 2000; 132(10): 825-832.
6. Emanuel EJ, Emanuel LL. The promise of a good death. Lancet. 1998; 351 (suppl 2): SII21-SII29.